



## 追悼 小林信雄名誉教授（元学院史資料室長）

山内 一郎（関西学院大学名誉教授）

小林信雄先生が去る3月23日、老衰のため91歳を名残りに地上の歩みを終え、主のみ許に帰られました。昨夜、池田五月山教会における前夜式で内山宏牧師から、小林先生が最晩年に至るまで信徒の方々と続けられた「聖書に問い、聖書から学ぶ会」について詳しくお聞きし、ご遺族をはじめ参列者一同大変慰められ、聖名を崇めました。今朝私は主として関西学院における小林先生の多大なご貢献を中心にその尊いご生涯を偲び、感謝を捧げたいとねがっています。

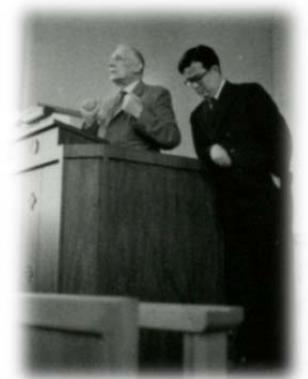
私が神学部に入學した1954年、小林信雄先生はカナダのトロント・イマニュエル・カレッジ、続いてスイス・ボセーのエキュメニカル・インスティテュートでの研究を終えて神学部に戻られ、新進気鋭の助教授として輝いておられました。関西学院における小林先生のご貢献は、研究・教育と学院行政の両分野にまたがります。

先ず研究面における小林教授の専門領域は新約聖書学で、トロント大学に提出されたB.D.論文「バプテスマに関する一考察」以来、教会論ことに聖礼典および教職制の問題を軸として展開され、その研究成果が著書『洗礼—その起源と意義』（新教出版社、1956）をはじめ、『神学研究』他の学術雑誌に発表された数多くの論文によって世に問われ、高い評価を得られました。その後先生の学問的関心は黙示文学思想やイエスの「譬え」、使徒パウロの神学など広範囲に掘り下げられ、その集大成『主の晩餐—その起源と展開』が定年ご退職後10年近く経た1999年、日本基督教団出版局から出版されました。全7章からなる本書（博士論文）は、「あとがき」に記されているように、「＜聖餐＞という主題をめぐって新約聖書とその周辺の文献の歴史的批判的研究と神学的思想的考察を統合する一つの試み」を「思想的構造主義」という形で遂行しようとする意欲的な学問的結晶であり、今後「聖餐」問題を扱ういかなる研究者も参照しなくてはならない大きな価値を有することが疑われません。

また小林先生は、スイスのエキュメニカル・インスティテュートでのヴィザトーフトやクレーマー【写真右】などとの出会いによって世界教会運動への関心を深め、この方面の論文、訳書も数々公刊され、とりわけ名著の誉れ高いH. クレーマー著『信徒の神学』の訳者としての貢献は大きく、同時に先生は日本学生YMCA運動やWSCF（世界学生キリスト教連盟）にもコミットし若い世代の指導に当たられました。

さらに関西学院および大学の行政面において小林教授が果たされた貢献も多大であります。とりわけ1969年をピークとするあの大学紛争のさなか、同年4月から二期4年にわたり神学部長の重責を担われ、日本基督教団の紛争と重なった最も困難な試練の中、神学教育の正常化と諸教会との関係修復のために尽瘁されました。あの時期の小林先生の辛労は察して余り有ります。その後息つく暇もなく、先生は1973年4月から学院宗教総主事、法人理事を4年間務められ、さらに1977年4月からキリスト教主義教育研究室長、また翌78年4月からは学院史資料室（現学院史編纂室）長を兼務され、その間、ランバス一次資料の収集並びに翻訳・出版、そして図録『関西学院の100年』の編集・刊行（1989）を果たされ、続いて学院正史編纂実務委員長として『関西学院百年史』資料編、通史編各二巻（完結1998）の構想を練られました。

関西学院の創立者W. R. ランバスは日本では無名に近い人物であり、日本滞在が4年余りという短期間であったこともあり、一次資料が殆どアメリカにあり、その全体像が長い間知られないままでした。学院創立70周年にW. W. Pinson, *W. R. Lambuth: Prophet and Pioneer, 1924*の抄訳（山崎治夫著『地の果てまで』）をリライトした『ランバス伝』が刊行され、これら数少ない文献を基に久山康院長の提案でランバスの生涯を描いた映画も制作されましたが（1979）、1980年代に入り、小林室長の肝いりで米国レ



イク・ジュナラスカのメソジスト教会歴史資料館、南メソジスト、ヴァンダビルト両大学のArchivesから、神田健次現室長らの献身的協力のもとランバスの著書、論文、書簡など貴重な文献資料が収集され、保田正義、半田一吉、宮田満雄、中西良夫諸教授らが翻訳を担当し、「ランバス資料」(1)～(5)として刊行されました。ここにはH. D. ハート氏のB.D.論文(エモリー大学)など米国でも出版されていない貴重な資料が数多く含まれています。

小林室長は、聖書的人間観に立ち、個人を英雄視し況んや神格化することを厳に戒め、所謂homageではなく、ランバスの生涯と思想を正しく評価し、その精神が持続的に継承されることを心底から望んで、純乎たる使命感をもって「ランバス再発見」のために尽瘁されました。キリスト教主義教育研究室の『年報』No.15(1987)およびNo.17(1990)に収録されているランバス関係Bibliographyは、一次資料約300点、翻訳を含む二次史料201点、その総数は500点をこえます。小林室長の並々ならぬ熱意とご尽力によって、学院創立者の実像に迫り、その高邁なヴィジョンを解明する本格的なランバス研究に必要な基礎資料が整えられました。

天に召された小林信雄先生の霊の平安を祈り、茲に深甚なる感謝を捧げます。

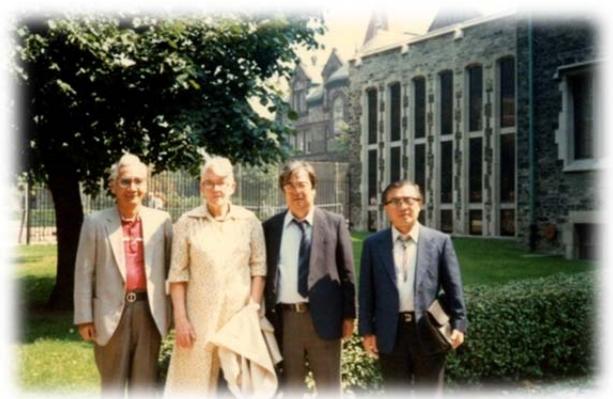
本文は、2014年3月25日、日本基督教団池田五月山教会において執り行われた葬儀告別式で式辞として述べた内容を一部省略、修正したものである。

## アメリカ・カナダへの資料調査・収集の旅

神田 健次 (学院史編集室長)

学院史資料室長を長く務められた小林信雄名誉教授が、3月23日に天に召されました。心より哀悼の意を表すると共に、多岐にわたりご指導をいただいたことに感謝いたします。

忘れがたい思い出は、1986年の夏休み、小林信雄先生、山内一郎先生と共に学院の歴史に大きな足跡を残されたW. R. ランバス院長やC. J. L. ベーツ院長などの宣教師の方々、学院の歴史に深いかかわりをもつミッションボードの英文資料の調査・収集の目的で、アメリカとカナダに出かけた旅のことです。その時に調査・収集した英文資料は、その後の図録『関西学院の100年』、『関西学院百年史』、『関西学院事典』などの編纂作業に重要な一次資料として役立ち、また多くの研究者たちにも活用されてきています。写真の上は、ニュージャージー州のドリュー大学のアーカイブを訪問した時の模様ですが、驚いたことは、小林先生とよく似た所長が出てこられたことでした。また、下の写真は、カナダのトロントにあるカナダ合同教会のアーカイブ前で撮ったものです。いろいろとお世話下さったグエン・ノルマン先生、トロントで合流された当時文学部の大島襄二先生も共に写っています。この資料収集の旅では、筆者はひたすら膨大な資料を小林先生から指示されるままにコピーし続ける係でしたが、その作業を通して、一枚一枚の資料の背後から血のにじむような当時の宣教師の方々の学院への使命と情熱が伝わってくるようで、その後の学院史研究の礎になったと思われています。



第40回 関西学院史研究会「**関学アメリカンフットボールと私**」 一般参加歓迎・申込不要  
武田 建 (関西学院大学名誉教授、元関西学院理事長、元関西学院大学学長、元KGファイターズ監督)  
6月12日(木) 15:10～16:40 関西学院会館2階 風の間 (西宮上ヶ原キャンパス)